

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

■研究プロジェクト報告

■研究プロジェクト

ポップカルチャーとキリスト教

RCC主任研究員 東 よしみ

ポップカルチャーとキリスト教のプロジェクトでは、二〇一八年の一月、二月に計二回の研究会を行いました。続けて二〇一八年春学期には、計三回の研究会を行いました。

まず、四月二十日(金)に第四回の研究会を行い、クリスティアン・ヘアマンセン研究員(法学部教授)による「ヨセフ物語」の発表がなされました。ティム・ライス作詞、アンドリュー・ロイド・ウェバー作曲のミュージカルを主にとりあげ、創世記のヨセフ物語が、ミュージカルにおいてどのように取り上げられて変容されているのか、映像を交えながら議論しました。

次に、六月二二日(木)の第五回研究会は公開で行われ、大宮有博研究員(法学部教授)が「神義論なき悪魔? マンガの悪魔と聖書の悪魔」という発表を行いました。手塚治虫『ネオ・ファウスト』、水木しげる『悪魔くん』、大場つぐみ、小畑健『DEATH

NOTE』などをとりあげ、日本のマンガがどのように悪の問題に取り組んでいるのか、キリスト教における神義論を説明するための存在である悪魔との比較から議論しました。

七月一九日(木)には、第六回研究会を公開でもち、難波功士研究員(社会学部教授)が「ゴスロリ・漫画にみるキリスト教関連表象をめぐって」という発表を行いました。ゴシック、ゴスロリが、西洋と日本においてどのように展開してきたのかを、マンガ、音楽、映画などの多様な媒体から位置付けた上で、日本のゴスロリ・マンガにおいて、キリスト教的表象がどのようにとりあげられていることについて議論しました。それぞれの研究会では、刺激的な発表の後、活発な質疑応答が交わされました。

秋学期にも続けて研究会を行い、研究成果を発信していく予定です。多くの方々のご参加をお待ちしています。

■研究プロジェクト

キリスト教主義教育の展開

—キリスト教主義学校における平和教育のあり方をめぐって—

RCCセンター副長 村瀬 義史

昨年度の活動をベースとしつつ、今年度は、キリスト教主義学校で「平和教育」に関わる生徒・学生への教育活動を担当しておられる方の実践に聞きつつ、研究を進めています。

「キリスト教主義教育」というものが、一部の科目やプログラムだけではなく学校のあらゆる活動を通して遂行されているのと類似して、広義の「平和教育」も学校全体による生徒・学生への教育的働きかけとしてなされるものであり、その中に、狭義の「平和教育」が位置づけられると考えられます。そのような関心から、第六回研究会(六月一日)に澤村雅史氏(広島女学院大学教授・大学宗教委員長)を招き、「平和教育」が多様化する中にある欠かれない一要素でありつつも欠かれない島における原爆投下と被爆体験を中心とする「平和教育」の実践について報告をいただきました。

広島女学院大学と本学の合同授業「平和学特別演習『ヒロシ

マ』を担当されてきた実践に基づき、どのような理念で、どのように授業をデザインしてきたか。受講生の様子の経年変化や、授業の展開で工夫を重ねてこられた点も含めて報告をうかがい、質疑応答と議論の時を持ちました。戦前・戦中に多くのキリスト教学校が共通して経験した国家との摩擦について、非戦・反核と「平和」の関係について、また、キリスト教学校における平和教育の固有の性格についても議論は及びました。

これを受け継ぐ形で、次回は一〇月一二日(金)一五時一〇分より関西学院吉岡記念館において公開シンポジウムを開催します。教科化される「道徳」との関わりにおいてキリスト教主義教育の独自性を問い、また、生徒との対話を重ねてこられた福島旭氏(関西学院中学部宗教主事)から中学部聖書科での実践に基づく研究報告をうかがい、多角的に「キリスト教主義学校における平和教育のあり方」を論じ合いたいと思います。

RCCキリスト教講座

RCCセンター長 水野 隆一

関西学院中部部や高等部は、キリスト教主義教育の一環として、保護者の皆さんを対象にした聖書やキリスト教について学ぶ集い(中学部「PTA聖書を学ぶ会」、高等部「PTA育友会聖書を学ぶ会」)を続けておられます。

大学には当初、保証人を対象にした、このような機会はなかったのですが、強い希望が寄せられ、一九九八年秋から、「父母のためのキリスト教講座」を開催することとなりました。キリスト教と文化センターは、「キリスト教主義教育の内実化を図る」ことをその目的としていることから、大学生の保証人を対象とするキリスト教講座

を開くことは、本センターの目的に合うと判断したものです。

当初は、大学在学生の保証人を対象としていましたが、一般の方の参加も希望が寄せられるようになり、参加していただくこととなりました。

一般の方が多く参加してくださるようになってきましたので、RCCの社会貢献の一環として、より広く参加していただける機会としたいとの願いから、対象を保証人だけに限定しないこととし、二〇一四年度から名称も「RCCキリスト教講座」と改めました。

RCCが開催するようになってから、講師は、宗教主事・宣教師・神学部教員が交替で担当しています。月一回、学期に四回、テーマを設けて、聖書とキリスト教を、さまざまな視点から取り上げる、興味深い講義が提供されています。最近のテーマと担当者を挙げてみます。

二〇一六年度春学期

「人間・社会・世界・『わたし』

―キリスト教の視点から―

(加納和寛神学部准教授)

二〇一六年度秋学期
「使徒言行録を読みましよう」

(大宮有博法学部教授)

二〇一七年度春学期

「不寛容を考える

―ヘブライ語聖書を手がかりに―

(井上智神学部助教)

二〇一七年度秋学期

「関わりを生きる歩み

―聖書の人物とわたしたちの生き方をとおして―

(梶原直美教育学部准教授)

今年度春学期は「関西学院のキリスト教」をテーマに、田淵

映画とキリスト教(1)

『ショーシャンクの空に』(1994年、アメリカ)

RCC主任研究員 打樋 啓史

ステイヴン・キングの小説をフランク・ダラボン監督が映画化した作品。

有能な銀行員アンディは、無実の罪で終身刑の判決を受けショーシャンク刑務所に収監される。腐敗した刑務所でアンディは他の囚人たちに酷い目にあわされつつも、レッドら何人かの囚人たちと心を通わせ、看守たちにもよい印象を与え、次第に刑務所内での信頼を得ていく。やがてアンディは脱走

結院長が、ご自分の関わりから、関西学院のキリスト教主義教育についてお話しされました(写真参照)。

本年九月からは、神学部の柳澤田実准教授が、「道徳性の進化と宗教」をテーマにRCCキリスト教講座を担当されます。「道徳性」や「聖なる価値」といった、これまでは扱ってこなかったものを、脳科学など実証的な科学が対象にするようになっていきます。柳澤准教授は、この分野について関心をもつて研究されています。どうぞ、ご期待ください。

計画を企て、二〇年近くそのために努力を続けるのだった。

所長ノートンとアンディが暗唱聖句でやり取りするシーンは有名だが、全体にキリスト教的色彩が濃い作品だ。原題「The Shawshank Redemption」の「Redemption」(贖い)は、キリストの十字架による救いを示す神学用語で、アンディが「贖い主キリスト」に重ねられているのは種々の点から確かめられる。彼は自ら危険を冒しつつ他

の囚人たちの心を解放し、最後にはノートンの悪を暴き刑務所をその支配下から解放する。その過程でアンディ自身も「贖われて」いく。自分を閉ざして生きてきた彼だったが、特にレッドとの友情によって心を開かれていくのだ。

中心テーマは「希望」である。六年間刑務所図書館のために毎日手紙を書き続けることも、一九年間一〇センチ大の小型つるはしで壁を掘り続けることも、アンディが抱く希望のなせる業だった。刑務所の後の生活を夢見ることによって、彼は過酷な生活に耐え、闇の力に麻痺させられず、自らの尊厳を見失わずにいられた。アンディはこの希望を仲間たちにも伝えていく。屋上のビールも、空から降ってくるモーツァルトの音楽も、受刑者たちが灰色の日々の中で「人間の心」を取り戻すために彼が仕組んだことだった。アンディは「人の心にはどんな力によっても奪えない何か」、つまり「希望」があると仲間たちに訴える。

パウロが「信仰、希望、愛」(Iコリント一三章)で「愛」に与えられた位置が、本作では「希望」に与えられているとさえ言えるだろう。諦めの雰囲気は満ちた時代だからこそ、希望のもつ力を正面から描いた本作が、日本でも世代を超えて愛されるのかもしれない。

